僕と妻とサリュ

１．ごあいさつ
皆さん、はじめまして、こんにちは。
僕の妻は、精神的な病を抱えており、２年ほど前からサリュに通所しています。
今年５月に行われた総会をきっかけに、僕はサリュの正会員になりたいと強く思いました。
その理由については、後ほど触れさせていただきますが、その後、所長である瀬端さんから、「“家族”という立場から、思うこと、感じられていることなどを、作文してくださいませんか？そして、よろしければサリュ通信に載せさせてください。」と、今回のお話をいただきました。

はじめは大変驚きましたが、総会でサリュのメンバー及びスタッフの方々が、力を合わせて懸命に取り組まれている姿を見て、「僕にできる事ならば・・・」と、お引き受けしました。
しかし、僕はとても口下手で文章力もありません。そして、公の場で、このように自分の思いや体験を語るのは初めてなので、不安な気持ちもありますが、僕の思いを綴らせていただきます。

２．妻との出逢い
僕と妻は、学生時代アルバイト先で出逢いました。
僕は当時大学生で、彼女は看護学生でした。彼女には、“いろんな臨床経験を積んで、ホスピスで働きたい”という大きな夢がありました。
僕にも何となく、「将来的には、こんな仕事に就きたいなぁ」という思いはありましたが、同い年ながら、彼女ほどの目標はなかったと思います。

アルバイト先では、新人をトレーニングする立場であった彼女は、テキパキと仕事をこなし、持ち前の明るさでいつも楽しそうに振舞い、そして、休憩時間には、教科書を開いて、将来の夢に向けて熱心に勉強をしていました。
僕はそんな彼女に惹かれ、交際を申し込みました。

３．妻の発病
大学生活もアルバイトも恋愛も、何もかもが順調にいっていた5ケ月ほど経ったある日、彼女から突然、「ごめん・・・。病気になった。」と告げられました。
　はじめは事の重大さを把握できなかったのですが、泣く泣く彼女が退学届けを提出し、「何でこんなワケのわからん病気になったんや！」と、あんなに明るかった人が自

暴自棄になっていく姿を見て、僕はどうしたらよいのか分からなくなっていきました。
「勉強は苦手やねん」と笑いながらも、自分の夢に向かって、あんなにも必死に頑張っていた彼女が、精神的な病を発病したことで、夢が絶たれてしまった・・・。
人生において、大きな挫折というものを経験したことのない僕は、そんな彼女に掛ける言葉がありませんでした。
しかし、一年間療養して病状が落ち着いた彼女は、後ろを振り返ることなく就職活動をはじめ、とある企業に就職しました。
この頃の僕は、『病気』といっても一日中寝込んでいるわけじゃないし、仕事にも就けるようになったのだから、もう病気は治ったんじゃないか？と、彼女の病を楽観的に考えていました。

4．結婚
お互い社会人として数年たった頃、若干若い二人でしたが、互いの両親の了承を得て結婚しました。妻のことが好きだから、一緒に居たいと思う気持ちが大きかったから、僕たちは結婚したのです。

「もう治ったんじゃないか？」と思い込んでいた妻の病には、“体調の良い時と、そうでない時”という具合に波があり、結婚前から妻の病は、やはり完治していないのだと気付きはじめました。そして、妻と一緒に住みはじめて、僕は、ふたたび妻の病と向き合うことになりました。

それでも、一日から、長くて半年ほど病の症状がみられない時もあったので、僕にとって、そんなに大きな問題だという認識は、まだ無かったのです。

5．寝たきりとなった妻
長い間症状が出ることもなく、落ち着いた生活を送っていた妻が、「いまから看護学校を受験したいって言ったら、反対する？」と、僕に尋ねてきたのは、25歳の秋でした。
妻は、「もう自分は、看護師としてフルタイムでは働けない体なんやってことは分かってる。それに資格を取っても、今のウチは、ホスピス勤務には就けないかもしれない。でも、それでもいいから、ウチは看護師になりたいねん。」と、訴えてきたのです。
18歳の頃から、傍で妻を見続けてきた僕にとって、妻の意思に反対する理由など、ありませんでした。

妻は会社を退職し、あんなに「苦手だ」と言っていた受験勉強に没頭。翌年、見事に看護学生に返り咲きました。
合格通知を手にして、「ありがとう。ありがとう・・・。ほんまに、ありがとう。」と泣き崩れ

た妻の姿を見て、一番感極まったのは、僕かもしれません。
それからは、主婦としても学生としても、妻は何事も一生懸命に取り組み、忙しい日々を送っていました。
そんな矢先、何事にも頑張りすぎてしまう妻の性格が災いしたのか、ふたたび病が妻を襲いはじめました。

病は徐々に悪化し、とうとう学校にも通えなくなりました。光や音を怖がる、食欲・意欲も落とし、そして、どんどん痩せ細っていき、妻の顔から、笑みをも奪ってしまいました。
あんなに明るく、身支度にも気を配っていた妻が、一人でトイレに行けなくなり、風呂に入ることも顔を洗うことすらできなくなって、毎日同じパジャマを着用し、長い髪は絡んだ状態で、一日中布団の上で「死にたい。辛い・・・」と嘆くようになりました。
そんな変わり果てた妻を見るのは、毎日とても心苦しかったですが、僕は仕事柄出張が多いので、寝たきりの妻の傍に、当分の間の食材を並べて、仕事に向かわなければならなかった時が、何よりも心を締めつけられて辛かったです。
だけども、一番辛く苦しい思いをしたのは、妻です。後に妻は、寝たきりで“人型”にカビが生えた絨毯を指差し、「ウチ、生き延びたよ！」と、疲れきった表情をしながらも、笑いながら言ってのけました。本当に妻の強さにはかないません。

寝たきり期間は、合算すると2年近く続いたのですが、あの頃は僕も妻も、「迷惑は掛けたくない。」という理由で、互いの実家には言えずにいました。
相変らず体調には波があり、調子の良い日が続くと、妻は自分の居場所を求めてパートタイムの仕事に就きました。
しかし、また調子が悪くなって寝たきりとなり、仕事を辞めざるをえなくなる・・・。
そんなことを数回繰り返すうちに、妻はすっかり自信を失い、「ウチの居場所は、家以外にはないんよ。せっかく元気になっても、こんな病気をもってたら、社会に出ていく場所がないんよ・・・」と、生きがいを見出せずに、ひとり孤独と闘っていました。

6．サリュとの出逢い
「これでは、いけない。」と思った僕たちは、妻の居場所探しをはじめました。
地域の精神障害者支援センターの方に紹介され、見学に向かった妻が、目を輝かして帰ってきた場所、それがサリュでした。

サリュに通所しはじめた妻は、みるみる笑顔を取り戻し、またたく間に会話も増え、僕も心から「ほっ」としました。
通所しはじめて2年経った今でも、妻の体調には波があるので、体調が良い時には週

に2～3回、サリュに通えている状況です。
現在、妻はサリュに慣れ親しみ、「みんなの前では、本来の自分でいられる」と言います。今年度からは、『上京こころのふれあいネットワーク』という、病気や障害をもっている人たちが、地域で生きやすく暮らすためには？ということを考える会に、妻はサリュのメンバー代表として参加しています。
「病を抱えた私たちが、10年後、20年後、生きやすい世の中で生きているかどうか・・・それは、いまの私たちに懸かっていると思う。」そう考える妻は、同じ境遇にある大切な仲間に囲まれて、本来の自分を取り戻し、本当の居場所を見つけた。
いまや、サリュは妻にとっても僕にとっても、失ってはならない大切な場所。僕は、そう感じています。

7.「人として見て」
「病気を抱えた奥さんで、色々大変ですね。」と、言われたことがあります。
正直、「大変ではない。」とは言えませんが、本人が一番大変だと思う。
僕は、妻のことを深い意味では、理解できないでいます。妻の思いや考えを聞き、お互い話し合った上で、ふたりのルールを決めていく。そんなことしか、できないのです。
過去にこんなことがありました。

食事をとった後、体調が悪く別室で横になっていた妻を想い、僕は食器を洗いました。きれいに片付いた台所を見て、僕は妻が喜んでくれると思いました。ところが、妻は、「気遣ってくれたのは嬉しいけど、家事はウチにとって大切な仕事やねん。すぐに片付けられないことは申し訳ないけど、ウチにさせて欲しい。」と言ってきたのです。
僕は「分かった。」と承諾したのですが、またある日、しんどそうにしている妻を見て耐え切れなくなり、僕は洗濯をしてしまいました。
すると妻は、「あなたにとって会社で仕事をするのと同じように、ウチにとって家事をすることは、社会的役割を果たすためにも、とっても大切なことなんよ。こんなことすら満足にできてないけど、仕事で忙しいあなたの役に立ってるって思いたいんよ。それに、家事はウチのリハビリでもあるねん。お願い・・・分かって欲しい。」と悲しそうに言ってきました。
そんな妻に、「でも・・・しんどいのに負担になり過ぎてへんか？頑張り過ぎてしまうところがあるって、自分でもよく分かってるやろ？もっと頼ってくれていいんやで。人に頼ることも大切やと思うで。」と自分の気持ちを伝えると、妻は「分かった。ウチにとって、頼ることも勉強やし、しんどい時は頼るようにするわ。」と、応えてくれました。

そんな日常の些細な出来事を通して、僕は「病気を抱えているから、やってあげよ

う！」とか、「支えてあげないと。」とか「協力してあげねば。」という考えは、大変おこがましいことなのだと気付きました。
『病を抱えている人』ではなく、『ひとりの人間として見て欲しい』妻は、そう思っているのではないかと思います。

8．やっぱり妻は凄い
現在、妻は僕たちが出逢ったあの頃のように、とても明るくパワフルです。
「病をもつ私たちのことを、一人でも多くの人に知って欲しい」という目標を持って、生き生きと輝いているように見えます。
そして、何より妻の凄いところは、寝たきりになった時以来、距離を置いていた互いの両親に、自分から歩み寄っていったことです。

僕には正直、妻が全てを話したところで“拒絶”されたら・・・という不安の方が大きく、妻の行動に手を貸すことができませんでした。
しかし妻は、自分の両親や僕の母親に、いま置かれている現状や以前の様子、そしてサリュのことを語り、自分の居場所を築き上げたのです。
以来、僕が長期出張に出る際には、しばらく実家で過ごすことが可能となり、僕も安心して仕事に向かえます。
また、僕の両親や兄妹と、妻は密かに連絡をとっているようで、明後日の夜には、僕の母と妹と妻の3人で“女子会”と称して、美味しいものを食べに行く予定だそうです。
（僕の夕飯は、どうなるのでしょうか・・・）

「病気を抱えた奥さんで、色々大変ですね。」だなんて、とんでもない！
「僕の妻は、病気を糧にどんどんパワーアップし、人生を大いに楽しんでいるのですよ・・・」
こんな風に返答したら、やっぱり笑われてしまいますかね？
妻いわく、強さや勇気を与えてくれているのは、『サリュ』なんだと。
僕たちは、これから先も、共に楽しんで生きていきたい。そして、妻と一緒になって本当によかったと思っています。

9．僕の思い（正会員加入について）
妻と寄り添って13年間、妻の病のことで誰にも相談できなかったことが、ないわけではありません。
妻が辛かった時期は、僕も辛かった。
妻の病には、もちろん薬が必要だろうが、多くの人の力が妻を支えてくれている。サリュに通いはじめて、人と人とのつながりの大切さを改めて感じました。

いままでは、妻が変わっていく姿を、ただ傍で見ているだけでしたが、サリュという存在の大きさを知ってからは、「もう他人まかせではいけないのだ。」と、心を突き動かされました。
サリュは、僕たちにとって大切な場所だから、自分たちの手で守り続けていきたい。
一人では大きなことはできないけれど、みんなで力を合わせることで、成し遂げられることが増えるかもしれない。
そして、サリュに集う者の家族同士が、意見交流できるようになれば、僕はとても嬉しいです。

大変長くなり恐縮ですが、最後まで読んでくださり、本当に有難うございました。